『建国大学同窓会報』第94号（最終号）より

解散総会で有終の美飾る
「天行健、帰大道」を信ず

会長　山口一郎

建国大学同窓会の解散総会が六月十日に開かれ、滞りなく終了、有終の美を飾った。同窓会の終焉は建国大学の事績の消滅でもあり、建国大学は歴史上の存在となった。

建国大学は今を去ること七十有余年、一九三八年アジア大陸の一角に、大きな理想を掲げて建学されたが、第二次世界大戦など時局の大きな変転に押し流され、存続僅か七年余、一九四五年閉学した。しかし大学が目指した道義世界の建設、民族協和の実現等の理念は色褪せることなく、今日の国際情勢を見ても明らかなように人類にとっての重要な命題であり、五民族青年の塾生活は様々な教訓を残し、小規模ながら歴史的実験であったと言える。

「満洲国」あるいは「建国大学」については、いろいろな言説がなされている。「偽」と言い、「傀儡」と言い、「手先」等々とマイナス表現で語られる。こうした見方は定着したかに思える。しかし歴史は変転する。「満洲国」の建国を、「建国大学」の創設を、「欧米列強のアジア進出」の実態を、「満州国の経済建設」等を無かったことにすることは出来ない。

建国大学一期生楊増志先輩は在学中、「反満抗日のカド」で日本官憲に獄死寸前の取り調べを受けたが、今日なお健在で、中国の中央テレビのインタービュー取材に応じ「満洲国の官吏には日本人も相当多くいた。彼らは満洲を侵略したといわれるが、悪行はない。真面目に自分の国を治めるように、満洲国を治国した」などと話している。（ご本人から日系同窓への来信）また「解散総会」での来賓挨拶の中で、槻木瑞生先生は「（本格的な）満州研究は（学会では）これからだ」と言及された。時流に阿らない論議を期待したい。満洲国史編纂刊行会の「満洲国史総論」には「満洲国の評価は百年後に定まるであろう」とある。

同窓会の幕引き行事の実行に力を注がれた故藤森孝一前会長は会報（第89号）の巻頭言で、日中関係の歴史に触れたうえで、「天行は健なり、必ず天運循環し、大道に帰するものと信じます」と書いておられる。私も全く同感である。万感交錯する解散総会の席にあって、私はつくづく、そのように感じた。

終わりになりましたが、韓国同窓会の安仁建会長から友情あふれるメッセージを頂きました。感慨一入です。有難うございました。

以上、先発して鬼籍に入られた諸先生、諸先輩、同窓諸兄にもご報告申し上げる。